

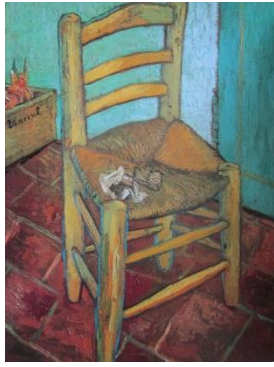
## ゴッホとゴーギャン展

東京都美術館 2016.10.08～12.18 愛知県美術館 2017.01.03～03.20

本展は、ポスト印象派を代表する画家「ヴィンセント・ヴァン・ゴッホ」(1853～1890)と「ポール・ゴーギャン」(1848～1903)の関係を、日本初の試みとして本格的に取り上げる催事である。二人は南フランス「アルル」で共同生活を行い激しい議論を重ねながらお互いに刺激を受け合い、精力的に作品を生み出していたが、「耳たぶ切除事件」があり2か月ほどで共同生活は破綻を迎えている。

展覧会は、現実の世界を見続けた「ゴッホ」と次第に創造の世界をも描く「ゴーギャン」の芸術のルーツや交流と創造の軌跡を辿り、他の画家との関連性を示すために同時代に活躍した「ミレー、コロー、モネ、ピサロ、ロートレック、ベルナール」らの画家たちの作品もあわせて展示されているので誠に興味深い。

《アルルのゴーギャンの椅子》 ゴッホ 1888年 油彩/キャンバス



ゴーギャンがアルルでの共同生活の拠点である「黄色い家」から去った後に、当時のアトリエで自分の椅子よりも高級なゴーギャンが使用していたアームチェアを描いた作品である。椅子の上の燃えるローソクに壁にも灯る燭台があり、ランプの光から夜の

シーンを描いた作品であるものとされる。この椅子の上のありきたりのローソクの炎は光と人生の象徴とされ、2冊の本はカバーの色から同時代のフランスの小説であるとされる。画伯は、当時(1888年)「自分の椅子」(右側)と「ゴーギャンの椅子」(左側)を別々に描いている。

《肘掛椅子のひまわり》 ゴーギャン 1901年 油彩/キャンバス



描かれている椅子は、アルル時代にゴッホが描いた「ゴーギャンの椅子」に類似してる。

「ひまわり」は、太陽に顔を向けるため巨匠にとっては理想郷で純粋で妥協を許さなかった「ゴッホ」との理想を目指した象徴でもあった。画伯は、アルルを去りタヒチへ向かい、ヨーロッパから取り寄せたひまわりの種を巻いて育てた「ひまわりの花の絵」を数多く製作している中の一枚の作品である。